

## MELにおけるZCQのMinimally Clinically Important Differences(MCID)の検討

The Minimum Clinically Important Difference of Zurich Claudication Questionnaire after Microendoscopic Laminectomy in Lumbar Canal Stenosis patients

福島 成欣<sup>1</sup>、岡 敬之<sup>2</sup>、大島 寧<sup>1,3</sup>、瀬川 知秀<sup>1</sup>、湯澤 洋平<sup>1</sup>、高野 裕一<sup>4</sup>、稲波 弘彦<sup>1</sup>

<sup>1</sup>稲波脊椎・関節病院、<sup>2</sup>東京大学医学部附属病院22世紀医療センター運動器疼痛メディカルリサーチ&マネージメント、<sup>3</sup>東京大学医学部附属病院整形外科・脊椎外科、<sup>4</sup>岩井整形外科内科病院

【はじめに】Zurich Claudication Questionnaire(以下ZCQ)は腰部脊柱管狭窄症(Lumbar Canal Stenosis以下LCS)の総合的な評価法として知られているが、その術前後における臨床意義のある差Minimally Clinically Important Differences(以下MCID)は未だ明らかではない。【目的】LCSの診断で内視鏡下椎弓切除術(Microendoscopic Laminectomy以下MEL)を行った患者の術前後の結果から、ZCQのMCIDを明らかにすること。【方法】2012年3月から2014年5月までの間に、LCSの診断でMELを行った649例を対象とした。それぞれの術前、術後一年時のZCQの重症度(7項目の点数(1-5)の単純平均、点数が高い方が重症)ならびに身体機能項目(5項目の点数(1-4)の単純平均、点数が高い方が重症)を集計した。MCIDは術前後のZCQを元に、Receiver Operating Characteristic curve(ROC)解析にて算出した。【結果】術後一年時でフォローできたのは349例であった。術前後のZCQは重症度で3.3から2.4に、身体機能項目で2.6から1.8に有意に改善していた(対応のあるt検定： $p < 0.0001$ )。MCIDは、重症度スコアで-1.0、曲線下面積(area under curve:AUC) = 0.81、感度64.8%、特異度86.8%であった。身体機能スコアでは-0.6、AUC = 0.80、感度79.8%、特異度67.1%であった。【結語】MELにおけるZCQのMCIDは重症度で-1.0、身体機能スコアでは-0.6であり、それぞれのAUCは0.8を超え高い診断能を持つことが分かった。